

変容するボリビアの日本人学校

吉富 志津代

大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任准教授

ボリビアへの移民

一〇〇年以上前、日本が貧困から抜け出すために打ち出した移民政策は、南米諸国の労働力不足状況との双方のニーズが合致した結果であった。その後、第二次世界

大戦中に途切れていた移民船は再開され、ボリビアのサンタクルスが移住者を受け入れたのは一九五五年ごろだった。それは、高度成長期に入ってライフスタイルが多様化していく日本より、素朴なボリビアの生活を選ぶ人びとであった。二〇一四年三月に筆者が訪れたときには、オキナワ移住地、サンファン移住地、サンタクルス市周辺にそれぞれ七〇〇〜八〇〇名の日系人が暮らしており、まだ一世たちがコミュニティ活動の主体となっているものの、高齢化に伴う世代交代のなかで日本人学校の役割にも変容がみられた。

自尊心を取り戻すために

ブラジル同様ボリビアからも九〇年代以降、多くの日系ボリビア人が日本に渡ったが、また戻って来た人も少なくない。戻ってきた子どもたちが学ぶ小学校一年生のクラスで授業をしていた日系四世の三〇代女性もまた同様だった。スペイン語を母語とする彼女は、相当な努力をして日本で小・中・



サンタクルス日本語普及学校の1年生のクラス

高の教育を受け、専門学校に進んだあとは貿易関係の会社に就職したものの仕事に納得できずにいた。考えた末、家庭で使う簡単な日常会話レベルのスペイン語を改めて学び直すためにボリビアに戻り、そこで自分の進みたい道を見つけている。授業は場合によつてはスペイン語での説明を補填しながら日本語で進めていた。ふたつの言語と文化の狭間で悩んだ末に自尊心を取り戻した経験から、同じ悩みをもつ子どもたちへの教育に携わることが自分の使命だと感じ、今ではいきいきと毎日を送っている。

状況をプラスに活かす

移住した日系人たちがデカセギとして日本に戻るといふ状況に流されていく子どもたちが、その環境をプラスに活かす可能性をようやく見だし、同時に南米の日本人学校は、姿を変えて役割を復活させつつある。ボリビア日本人会の役員の一ひとは、「日本語という言語を学ぶだけではなく、日本人の勤勉で正直な文化も含めて学ぶことが、ボリビアと日本のふたつの国にかかわって活躍できる人材育成という戦略にもなる」と語る。今後のグローバル化が進む世界で、日本が取り残されないための知恵につながる視点ではないだろうか。